
ワンダーラスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンダーラスト

【Nコード】

N5442M

【作者名】

【あらすじ】

某所にアップした普独SS、国名使用、プロイセン ドイツ
消失を臭わせる表現が御座います。

(前書き)

A t t e n c i o n !

消失表現が御座います。

昔親父からこんな事を聞いた事がある。

何時の事だっただろうか、

自分達よりも遙か遠くにある存在の筈である太陽が真上で燦燦と自己主張をしているとても晴れた日の事だったような気もするし、大粒の雨粒に叩き付けられた土の匂いが血の生臭い臭いに混じって鼻奥で咽返るような酷い雨の日だったような気もする。

空が濃灰色の雲に覆われていて現代よりも遙かに澄んでいる湿気を孕ませた空気が鼻腔を突くような日だったかもしれない。

若しかしたら、白い白い文字通り純白の雪が屋根を覆い隠し辺りを静寂で包み込んだ後首を締め付けるような冷気で人々を苦しめた日の事だったかもしれない。

兎に角俺は親父に聞いた話の内容だけは覚えている。

其の頃の親父は既に年老いていて、若い頃の面影を多少残しては居るものの、

其の彼の澄んだ瞳以外はあの頃親に隠れフルートを吹いていた少年とは似ても似つかない老い耄れになっていて。

「ねえプロイセン。」

「何だよ、親父。」

「旅を試してみたいねえ。」

「んだよ急に、まだ国務残ってますぜえ国王様よ。」

「酷いなあお前は、一寸言ってみただけでは無いか。」

「気まぐれもよしといってくれよなア……それに気まぐれで身体壊されたら俺が困る。」

「ははは……こんな老い耄れの身体なんて、放っておいても壊れるさ。どうせならやりたい事やって壊すのが、一番じゃあないか。」

「ほほう……それが世界一強くて格好良い俺様の上司の台詞か？アア？」

「……うん、悪かったよ。プロイセン、」

「わかりやー其れで良いんだよ、判れば。」

「うん、判ったよ、でも……人は皆、眠る場所を求めているんだよ。」

正直親父の言っている事は普段と違い全く意味が通って居らず、俺はただ眉根を寄せまさしく困ったとでも言いたげな表情を作ってみせる（親父には不機嫌そうといわれるのだが）

しかしその様な表情をつくろうとも親父は相変わらず普段のように話題を変える事をせずに。

普段仕事をしている書斎の豪勢な作りの窓の外から、ただ空を眺めていた。

ガラスを反射して俄か透けて此方に見える親父の其の姿は、普段のように景色を眺めているのではなく、何所か遠くを見据えているようで。

背筋に悪寒が走るけど、其の意図は判らなくて。

ただただたまらなく怖く、意味がわからなくて。

「はっ……意味わかんねえよ。」

俺は其れだけ言えば本来親父が座るべきであろう赤いソファから腰を上げれば、ソファの背凭れに掛けていた上着を肩に掛けて足早に書斎を後にした。

其れが俺の見た生きている彼の、最期の姿だった。

ワンダーラスト

「……………つ……………」

現在時刻午前十時三十分過ぎ。

午前中に起きる俺様はまあまあ上出来という所だろうか（下手をする俺様は午後まで眠っている事が最近多いのだ）

ヴェストは会議に出席していて、今日も多分リビングの二人で暮らすには聊か大きい気もするダイニングテーブルの上に、数行のメモ書きと朝飯を残し会議場の方で今頃胃を痛めているのだろう。

窓の外では俺のベッドの横のサイドテーブルの上で眠っている小鳥ちゃんに興味でも持ったのか雀が数羽其処に止まって興味深そうに此方を眺めて居り、

雀で飾られた窓枠の向こう側には昨日と特に変わらない少し高く、色素が薄くなつた空と、

俺等の家のある住宅街のメインストリートの脇を彩っている鮮やか

……とは言い難いものの、

水彩絵の具で彩られたような柔らかい色をしている大きめのサイズの木ノ葉が、風に舞い空に彩りを添えていた。

普段と何も変わらない朝、何も。そう何も。

其れが今の俺に僅かな期待と希望を抱かせ、俺様の素晴らしい目覚めに水にしては性質の悪すぎる液体を差すのであった。

夢を見た、そう親父が出て来る夢。

此処最近毎日同じような夢を見る。

いつ頃からなんだと深く問われると答えられそうにも無いから、誰にも相談はしていない。

それに夢の内容を問われてもあまり深くは覚えていない。

昔親父の仕事をしていた書齋の風景と懐かしい其の古びた本の匂いと老人特有の上品なコロンの香りが緋い交ぜになつた其れが心地よ

く咽返るような空間に。

そう其処に居たということしか思い出せないのだ。

……否、思い出せないという訳ではない。

『人は皆、眠る場所を求めているんだよ。』

そうこの声、この親父の言葉だけ妙に耳に焼き付いている。

そして其の声を思い出すたび、俺は胸の奥深くを槍で幾度も幾度も貫かれるような不安と恐怖が混ざり合ったような感覚を覚えて。

俄か願うような気持ちを用意に抱えつつ、慌てて毛布の下から包帯でぐるぐると巻いた左腕を取り出す。

最近言う事を聞かなくなつて来た右手で迅速に、且つ丁寧に白い布の下から身体の一部を取り出すと、期待通り其処には「まだ」腕があった。

しかし其の腕のあるべき部分が多少透け、ベッドの向かい側にある姿鏡を映してしまうのだ。

しかも其の姿鏡が俺様の素晴らしい姿を喜んで反射し、俺に現在の俺の左腕の状況を残酷な程鮮やかに思い知らせてくれる。

だけれども此れ如きで憂う俺様では無い、

なんてつたつてこのようなスケルトン症（勝手に名前つけてやった、精々感謝しろ）は俺様の身体の至る所に既に発症してしまっているのだから！

左足は満足に動かないし目の半分は少し輪郭がぼやけるようになってきた（片目で補えている範囲だから問題はないのだけど）

右手の指の節々も段々反抗期に入つて来た上拳句の果ては体中に巣食い俺をベッドに繋ぎとめようとする倦怠感！

いつ頃からこの症状が始まり、どのように侵攻してきたのか其れは全くと言って良い程覚えていない。

記憶まで薄れ始めてきてしまっているのだろうか。このような症状の侵攻を許すとは国として何たる失態！

いや、国じゃないんだけどさ。もう、

誰かに縋れるのなら縋ってしまいたい、

誰かが助けてくれるのなら何でもしてやるっ、

だけど誰も助けられない縋らせてくれないだから仕方ない。

格好いい俺様を慰め縋らせてくれるのは他でもない俺様自身以外誰にもいないのだ。

俺様というこの大きく偉大なる存在を受け止めることができるのは自分以外にありえないのだから。

第一自分は既に存在意義を失っている、そう失っている。何も無い、何も無いんだよ。

此れで俺が消えること即ちヴェストの負担が格段に減ることとイコールで繋げるだろうか？

『此れでやつと消えることが出来る。』

今まで弟にどれだけ迷惑を掛けて来たのだろうか、この駄目な兄貴は。

政府から支出されている部屋一部屋、

限られている政府から提供されている中の一人を想定した生活費の中で二人分の生活費の捻出、

我侭なお兄様の気まぐれな要望を出来る限りの範囲で聞き入れる事。

(流石は俺様の弟だな)

何時だったか人間の価値は、葬式で涙を流してくれる人の数で決まるといつていた人間が居た気がする。

（ソイツが国民だったか、はたまた別の国の囚人か捕虜だったか。若しかしたら吟遊詩人だったかもしれない。兎に角詳細は覚えていない）

俺は誇れることでは無いがまあ色々人には言え無いような事をし
てきている。

公では「神と信仰の為」と体裁を保っていたが、中身はただの弾圧
という名の殺戮だ。

昔ヴェストと日本に視察に言った際、多少日本語を勉強したような
覚えもある（今は綺麗さっぱり忘れてしまった）

その際に日本語の辞典（訳がわからない）で偶然引いたページに書
いてあったのだ。

信仰 神を信じるとかいう意味だったと思う。確かこれの読みはし
んこう。

侵攻 他国や他の領土に攻め込むこと。これの読みもしんこう。

全く同じ音で全く違う言葉を表す其の言葉。

俺のしんこうは恐らく其の両方の意味を取っていたのだと思う。

綺麗なものではない、寧ろ酷く汚く、穢れている。

国務だけでなく私用でも色々な事をした。

他国の捕虜への過度の拷問（殺めてしまったことも一度や二度では
ない）、蹂躪、強姦、エトセトラ。

兎に角色々やってきているのだ、国だから仕方が無いと言っても其
れだけでは片付けられないほどの事。

こんな奴が死んで、誰が泣く？
精々ヴェスト位なものだろう。若しかしたらそれも演技なのかも
れない。

良いじゃないか、好都合だ。消えてしまう事なんて。

この消え方なら死体だって残らない、丁度良いじゃないか、なんか、
俺なんか、俺なんかさア。
さあ消えてしまえ！！今すぐに！！！！

そう念じた所でそう簡単に消えるものではない。

姿鏡に映したままだったスケルトンな左腕をシーツの上におろすと、
白いシーツが腕越しに透けて見えた。

不意に目頭が熱くなる、どうしてどうして。好都合の筈なのに。
弟の為にもなる。

ヴェストの

ヴェストの……

『まだ消えたくない』

妙な話だと思うが、端的に言えば俺は弟の事が好きだ。

likeの好きでは無い、兎に角兄弟愛とかそういう生温い好きの
つもりではない。

若しかしたら行き過ぎた其れの類なのかもしれないけれど。

兎に角正常な思考回路や精神を保てそうに無い薄れ行く俺様は、其
の正常でない思考回路だからこそこうして弟の事が人として一つの
其れとして好きだと言ってしまう訳で。

言うつもりは無い。

言えばあの生真面目で可愛い弟の事だ。きつと三日三晩悩んでしま

うだろう。

しかも既にヴェストには意中なのか良くわからないが気にしているような人は居る。

そして認めたくないが其れは俺と同姓で、俺が人としてでも可愛がっている国家でもあって。

どうしようもない、今更どうする時間も無い。

取り敢えず俺の意思の中には消えたいという思考と消えたくないという私考が縋い交ぜになって心の大きな大きな穴を作り、其処にまた取り敢えず都合の悪いものを放り込んで蓋をしようとしている所のようなものなのだ。

だって其れを全て解決するまでの時間は、既に俺様には残されていないだろうから。

はぁ、と一つアンニユイなため息をついて見る。
すると見る見るうちに瞼が重くなり、身体が必要以上に重力に忠実になる。

一度這い上がった白い天国のような素晴らしい居心地のベッドの中に戻ってしまうと、もう戻れない。
否、戻ろうとする気すら起きない。

サイドテーブルで眠っていた小鳥ちゃんは外で雀と遊びにでも行ったのだろうか。

大分簡素になった窓枠からは太陽が嘲るような柔らかい日差しを窓の中に投げかけつつ、水彩色の空を更に色の薄いものにしてまで自身の存在を過度に主張していた。

現在時刻午後12時15分前。俺は再度瞼を閉じ、つかの間の安楽を求め情眠を貪り喰らう事にした。

「兄さん、近所迷惑だ……」

「いーじゃねえかよ別にー、此処防音揃ってんだろ？」

「まあ確かにそうだが……」

最近どうも兄の様子が可笑しい。

否前々からこのように嫌に浮かれた人だったのだけれども。

最近無理に浮かれて居るような、そんなような気がしてならないのだ。

「Und sollte mir ein Leids ges
chehen……」

其の自分の独断とも言い切れてしまう其の嫌な予感に分類されるであらう其の意思で、

目の前で拳でマイクを作り、珍しく酔っ払って歌っている兄を止める気にもなれないのだけれど。

照明が深夜となった今でも煌々としている部屋の中に窓から弱弱しく微弱な月光が差し込んでくる。
月光に当てられた兄は普段とは対照的に、何故か酷く儂げな存在に思え。

嫌な予感はしている。だけれども、

その意味がわからない

「 Wer wird bei der Laterneste
hen, Mit dir Lili Marleen? ...
」

(終ワラナイ歌ヲウタオウ)

(ボクガ、終ワツテシマウマエニ)

(後書き)

此処まで読んでくださり有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5442m/>

ワンダーラスト

2010年10月11日20時37分発行